１．序曲『謝肉祭』作品９２（ドヴォルザーク）

ドヴォルザーク（Antonín Leopold Dvořák：1841～1904）は、チェコ国民学派を代表する作曲家である。

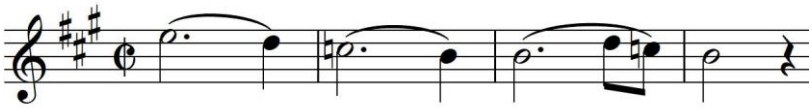
序曲『謝肉祭』は、同時期に作曲された序曲『自然の中で（作品９１）』、『オテロ（作品９３）』とともに、演奏会用序曲３部作『自然、生活そして愛』を構成している。国分寺フィルでは、このうちの「自然の中で」と「オテロ」を、それぞれ２０１４年（第４９回）と２０１６年（第５３回）の演奏会ですでに取り上げており、今回「謝肉祭」を演奏することで３部作の完結！である。

「謝肉祭」とは文字通り、お肉に感謝して食べまくるお祭りであるが、日本では毎月？毎週？人によっては毎日？「謝肉祭だぁ！」と銘打って焼き肉屋さんに駆け込む御仁も多いことだろうが、ここでいう「謝肉祭」とは、キリスト教の行事の一つで、イースター（復活祭）と関連している。復活祭の前４６日間は「断食の期間（四旬節）」とし、肉を食べない習慣があった。そこで、その四旬節に入る前に「謝肉祭」と称して、肉などを食べて大騒ぎをしておくのである。

曲は、三部形式、というか三部構成となっている。

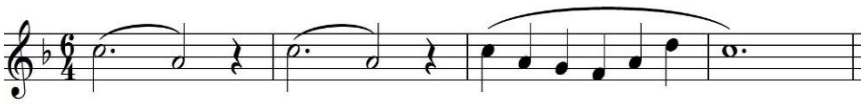
第１部は、冒頭から躍動するリズムに乗せて第１主題が提示される。お祭りの賑やかさを表している。このテーマは、日本テレビが放映している『有吉ゼミ』において、大食いチャレンジのコーナーの BGM として使用されていることでもおなじみである。

一方、ヴァイオリンが奏でる第２主題はどこか悲しげである。



これは、やがて訪れる「灰の水曜日（四旬節の初日）」を憂いでいるかのようである。

再び活気が戻ると、曲は第２部（中間部）に移行する。ここは、祭りの合間を表しているのだろうか、田園風景を眺めながら自然の中でホッと一息という様子である。コール・アングレのオスティナート（1　つのフレーズの繰り返し）に乗せてフルートが牧歌的なメロディ　ー（中間部主題）を奏でると、クラリネットが『自然の中で（作品９１）』の主題（下記譜例）を基にしたモチーフで応答する、という長閑（のどか）な曲想である。



『自然の中で』主題

なお、このモチーフは、『オテロ（作品９３）』においても度々登場する、三部作に共通したフレーズである。 祭りが再開すると（第３部）、最後は「お肉、最高っ！」とばかりに、大盛況のまま曲を締めくくる。

この第１部のように「謝肉祭」と「四旬節」とを同時に表現したものについては、オランダの農民画家ブリューゲルの絵画によっても見ることができる。